



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

キリストの聖体 C年 (2022年6月19日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 14章 18—20節

第二朗読：コリントの信徒への手紙1 11章 23—26節

福音朗読：ルカによる福音書 9章 11b—17節

パンは増えた

三つの朗読ではなく、福音朗読箇所^{かしよ}に注目しましょう。今日の福音の前後を見てみますと、9章の冒頭^{ぼうとう}でイエスさまは十二人^{はにん}を派遣^{はんせん}します(1-6節)。そして、ヘロデの戸惑い^{とまど}が伝え^{つた}られます(7-9節)、その後^{のち}に今日の朗読箇所^{かしよ}があって、そして18節からはペトロが信仰^{しんぎょう}を言い表^いします(18-20節)。「いたい、何者^{なにもの}だろうだろう」(9節)のヘロデのつぶやき^{つぶやき}のようなことばは、19節の「群衆^{ぐんしゅう}は、わたしのことを何者^{なにもの}だと言^いっているのか」というイエスさまの問いかけ^とへと続^{つづ}きます。そして、その答え^{こたえ}が「神からのメシア^{メシア}です」(20節)というペトロのことば^{ことば}に表^{あらわ}れます。つまり、今日の朗読箇所^{かしよ}は「イエスさまって誰^{だれ}？」という問いかけ^とと答え^{こたえ}の中にはさま^いれて位置^ちするのです。しかも、「使徒^{しと}たち」(10節)と呼^よばれる十二人^{にん}が戻^{もど}ってきて、イエスさまに報告^{ほうこく}して、彼ら^{かれら}と一緒に^{いっしょ}にベトサイダ^{ベトサイダ}の町^{まち}に引^ひっ込んだ^{かか}にも関わ^からず、群衆^{ぐんしゅう}が追^おいかけてきた場面^{ばめん}から朗読^{らうどく}が始^{はじ}まります(10-11節参照^{さんしょう})。

そうしますと、今日の福音朗読^{きんぎょう}の物語^{ものがたり}は、1. イエスさまがどなた^{あな}であるかを明らか^{あき}にするために、2. そのイエスさまに仕^{つか}える「十二人^{にん}」の役割^{やくわり}を明らか^{あき}にするためにあると考えてよいでしょう。

16節の「すると、イエスは五つ^ごのパンと二匹^{ふたひき}の魚^{いそ}を取り、天^{あめ}を仰^{あお}いで、それらのために賛美^{さんび}の祈^{いのり}りを唱^{とな}え、裂^さいて弟子^{でし}たちに渡^{わた}しては群衆^{ぐんしゅう}に配^{くば}らせた」に注目^{ちゅうもく}しましょう。「天^{あめ}を仰^{あお}いで」は直訳^{しやく}すると「天^{あめ}を見上^{みあ}げて」となります。旧約聖書^{きうやくせいしょ}にはよく登場^{とうじょう}する表現^{ひょうげん}です(創^{すう}15章5節、申^{しん}4章19節、ヨブ^{よぶ}22章26節、二マカ^{にまか}7章28節)。「それらのために賛美^{さんび}の祈^{いのり}りを唱^{とな}え」は直訳^{しやく}すると「それら^{それら}を祝^{しゆく}福^{ふく}して」となります。他の共観福音書^{きんかんきんぎょう}とは異^{こと}なって、イエスさまは神^{かみ}さまを祝^{しゆく}福^{ふく}したのではなく、食^たべ物^{ぶつ}(パンと魚^{いそ})を祝^{しゆく}福^{ふく}したのです。

「天^{あめ}を仰^{あお}いで」、「賛美^{さんび}の祈^{いのり}りを唱^{とな}えて」、「渡^{わた}して」、「配^{くば}らせ」たというイエスさまの五つ^ごの動作^{どうさ}は、ミ

サの聖体制定のことばとつながります。しかし、こういった一連の動作はユダヤ人たちの通常の食卓でも見られるものだったそうです。エマオの物語でも復活したイエスさまがパンを取って祝福し、それを裂いて二人のお弟子さんたちに渡しました(24章30節参照)。二人のお弟子さんたちは、イエスさまの動作を通してイエスさまであることに気づきます。今日の朗読箇所でもイエスさまの動作が、イエスさまがキリストであると証言するペトロの信仰告白へと続いているのではないのでしょうか。

ところで、「配る」はギリシア語ではパラティセーミですが、広い意味をもった単語です。まず、「食物を差し出す」という意味があります(ルカ11章6節参照)。さらに、「ゆだねる、任せる」の意味にもなります。「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます」(使20章32節)とパウロはエフェソの教会の人々を神さまにゆだねてエルサレムへと出発します。さらに「説明して論証する」の意味でも使われています。パウロは「このメシアはわたしが伝えているイエスである」と説明し、論証した(使17章3節)とあります。

イエスさまの最後のことば「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(ルカ23章46節)。ここでもパラティセーミが使われています。イエスさまは神の霊によって生まれ、神の霊によってご自分が神の子であることを証しされ、神の霊によって助けられ、導かれて宣教活動をし、最終的に神の霊によって十字架へと向かいます。その霊を父に「ゆだねた」イエスさまは、ミサの中で神のみことばで「説明して論証する」ことで天の国をわたしたちに教えてくださいますし、何よりもご自分の御体であるホスチアを「差し出して」わたしたちをいのちへと招くのです。このいのちを受けたわたしたちはイエスさまがどなたであるかを人々に「差し出し」、「説明」するのです。主の御体であるご聖体を「配られた」わたしたちは、こうしてイエスさまをこの世にもたらすものとなるのです。

17節：満腹した

『ルカによる福音書』にはよく登場することばです(6章21節、15章16節、16章21節)。神の国の宴と関係しているのかもしれませんが。

今日の福音朗読では「十二人はそばに来てイエスに言った」(12節)で始まり、「残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった」(17節)と「十二」ということばで囲われていることに気づかされます。十二はイスラエルの十二部族を表すのでしょう。ですから、イエスさまがパンを増やした話は全イスラエルのための食事を暗示しているとも考えられます。

奇跡を行ったイエスさまへの反応はありません。ただ、18節からイエスさまへの人々の誤解が述べられますし、その後で奇跡を見ても悔い改めなかったベトサイダの町を嘆くイエスさまのことばもあります(10章13節)。そうしますと、今日の福音の物語での奇跡はお弟子さんたちに向けられたものではないのでしょうか。五千人もの人が空腹という絶体絶命の状態でのお弟子さんたちの無力、それに対応するイエスさまの力あるわざが対比されているように思います。こうして、改めてイエスさまとは

どなたなのかに^{かんしん}関心が向きます。その答えが「神からのメシアです」(20節)となるのでしょう。また、イエスさまを^{つう}通じてお弟子さんたちも同じように力あるわざを行えることを教えてくれています。

説教 パンは増えた

大学を卒業して、就職した。近くの教会に通^{かよ}うようになった。いつの間にか教会学校のリーダーの一人になっていた。夏休みになった。みんなで林間学校に行った。最終日は日曜日だった。神父さんがミサをしてくれた。五千人にパンが行きわたり、^{だれ}誰もが満腹したお話だった。説教の中で神父さんはこう^{かた}語った。「本当に、パンが^ふ増えたと思うのかい？ そうじゃないんだ。これは、イエスさまのおかげで五千人も人の気持ちが変わったというお話なんだ」。それを聞いて、わたしは妙に^き納得した。その日の夕方、林間学校から^{かえ}帰ってきて、その神父さんが夕食に^{さそ}誘ってくれた。焼き肉を^つ突つきながら話した。「神父さん、今日の説教はよかったです。ボクはパンを増やしたことが信じられなかったんです」。「そうなんだよ。パンが増えたかどうかより、人々の^{たいせつ}ところが変わったことが大切なんだ。」と神父さんはしたり顔で話した。

あれから40年が^す過ぎた。その神父さんも歳を取って、今は車椅子での生活をしている。少し前までは司祭たちのミサで見かけていたが、最近は見かけることもなくなった。福音書の中でパンを増やす話に出くわす^{たび}度に、その神父さんに^と問いかけたい気持ちにさせられる。「神父さん、今でも本当にパンが増えたわけではないと考えているんですか？」

いや、すっかりと弱ってしまった老司祭をいじめるような質問はよくないとグッと言葉をのみ^こ込め込む。わたしは、パンが増えたと信じている。



初聖体おめでとう

ソフィア おもと さら 大本 沙良ちゃん
ビテルリーのローザ むこうやま はな 向山 晴華ちゃん

洗礼おめでとう

アシジのフランシスコ おだぎり ぜん 小田切 善くん
クララ おだぎり すい 小田切 翠ちゃん

(2022年6月19日)

